



Title	北欧語における方向を示す副詞について : ”hit”と”dit”を中心に
Author(s)	清水, 育男
Citation	IDUN. 1986, 7, p. 27-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

北歐語における方向を示す副詞について

—— “hit” と “dit” を中心に ——

清 水 育 男

I. 序

代名詞から派生した空間を示す副詞に関して、たとえば、

- (1) He lives *here/there*. *Where* does he live?
 (2) He came *here*. He went *there*. *Where* did he go?

のように現代英語では、(1)静止を示す場合、(2)方向を示す場合のいずれにかかわらず *here*, *there*, *where* と同じ副詞を用いて表現するのが通例である。しかし(2)の方向性を特に表したければ、やや古風な語を用いて、(1)及び(2)の違いをそれぞれ *here* ~ *hither*, *there* ~ *thither*, *where* ~ *whither* として表現することができる。英語も時をさかのぼり古期英語に至ると、場所の副詞は、次のような区分が保たれている。

Place where(静止)	Place to which(方向)	Place from which (出発点)
hēr 'here'	hider	heonan
p̄ær 'there'	pider	ponan
hwær 'where?'	hwider	hwonan ¹⁾
⋮	⋮	⋮

このような区別、すなわち静止・方向・出発点という空間の副詞の三系列は、北ゲルマン語では、今日に至るまで綿々と保持されてきている。上記の古期英語の三系列区分は、現代北歐諸語において次のように表される。
 (以下静止・方向・出発点の順)²⁾

スウェーデン語 [ス]

här ~ hit ~ härifrån, (hädan)³⁾

där ~ dit ~ därifrån, (dädan)

var ~ vart ~ varifrån, (vadan)

デンマーク語 [デ]

her ~ herhen, (hid)⁴⁾ ~ herfra, (heden)³⁾

der ~ derhen, (did) ~ derfra

hvor ~ hvorhen ~ hvorfra

ノルウェー語 (Bokmål)

her ~ hit ~ herfra

der ~ dit ~ derfra

hvor ~ hvor, hvorhen ~ hvorfra

ノルウェー語 (Nynorsk)

her ~ hit ~ her(i)frå

der ~ dit ~ der(i)frå

kvar, kor ~ kvar, kor ~ kvarifrå, kvar ifrå

フェーロー語

her ~ higar ~ hiðani

har ~ hagar ~ haðani

hvar ~ hvar ~ hvaðani, hvar frá⁵⁾

アイスランド語

hér(na) ~ hingað ~ héðan

þar(na) ~ þangað ~ þaðan

hvar ~ hvert ~ hvaðan

以上を見比べると、静止の副詞に関しては北歐諸語の間で一致している。他のゲルマン諸語ともおよそ合致していることから、保守的な語であることを物語っている。

次に出発点の副詞をみると、-dan/-den/-ðan タイプにおいて、用法こそ衰退・消失している言語もあるが、北歐語内でおよその一致が認められ、古い副詞であることを示している。ただフェーロー語の hiðani 系列にお

いて末尾の ⁶⁾-i の起源に問題点はあるが、語源的には、上記のタイプと同一である。現在では、-frán/-fra/-frá タイプが、大陸スカンディナビア諸語（スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの各言語）の間でほとんど -dan/-den タイプを駆逐してしまっている。ただここで注意しておくべきことは、この innovation は、大陸スカンディナビア諸語内で生じた現象で、アイスランド語には達しておらず、面白いことに位置的にその中間にあるフェロー語に hvaðani と並行して、hvar frá という形がみられることである。

更に方向の副詞においても、疑問詞を別にして大陸スカンディナビア諸語と他方アイスランド語・フェロー語との間に、出発点の副詞と似たような区画が引ける。大陸スカンディナビア諸語においては hit/dit,⁴⁾ これに対しアイスランド語では hingað/pangað で、地理的にその中間にあるフェロー語では双方とも異った higar/hagar を持っている。このフェロー語の方向の副詞については後述することにして、hit/dit 及び hingað/pangað が、かつて相互にいかなる関係であったかを検討し、特に hit/dit の語源について拙稿で論じてみたい。

II. 古期ノルド語における方向の副詞について

現代語の hit/dit, hingað/pangað の源を論ずるには、各言語の文献の最古層にさかのぼらなければならない。ここでは hit/dit を所持している東ノルド語の代表として古期スウェーデン語に、西ノルド語の代表として hingað/pangað を持つ古期アイスランド語に焦点をあてることにし、またこれよりも更に古い段階の、しかしかような副詞に関しては極めて乏しい例しか存在しない共通ノルド祖語時代 (urnordiska, 0年頃～800年頃⁷⁾) のルーン碑文についても言及し、ゲルマン語派において印欧祖語からの古い特徴をよく保っているゴート語とも比較しながら、hit/dit, hingað/pangað が、文献の最古層において相互に占めた位置を論ずることにする。

古期スウェーデン語 (äldre/yngre fornsvenska, 以下古スと略す⁷⁾) の

空間の副詞は、Noreen (1904) §474 によると次のようである。

hær ~ hit(hingat) ~ hæpan

pær, par ~ pīt(pingat) ~ pæpan

hwar ~ hwart ~ hwapan

古期アイスランド語 (fornisländska, 以下古アと略す⁷⁾) では、Krause (1948) §118 によると (一部 Gordon (1957) §152 も参照),

hér ~ heðra, hingat ~ heðan

par ~ paðra, pangat ~ paðan

hvar ~ hvert ~ hvaðan

古い時代にさかのぼっても I 章の序で述べたように、静止と出発点の副詞については、ささいな食い違いはあるが、各々同一語源であることは明らかである。問題は方向の副詞にあると言える。古期西ノルド語 (fornvästnordiska) と古期東ノルド語 (fornöstnordiska) にいかにしてこのような差異が生じたのであろうか。

古期東・西ノルド語の方向の副詞を合わせると、heðra : hingat : hit, paðra : pangat・pingat : pīt と三巴を形成しているが、hingat タイプは、両者に共通していたことは銘記しておくべきであろう。

III. heðra/paðra について

しかしながら heðra/paðra は、通例静止の副詞として分類されている。そこで heðra/paðra と hingat/pangat とが相互にどのような位置を占めていたのかを吟味するには、まず heðra/paðra の元来の機能を調べる必要がある。heðra/paðra の例をいくつか挙げてその意を確かめてみよう。

heðra:

• *pat hafa menn heðra mælt.* Konr. 51⁵¹

• *heðra i löndum* ∴ her i disse Lande. Konr. 60⁹⁹

• *heðra nær* ∴ her i Nærheden. Landn. 2. 28

paðra:

- *konung drápum fyrstan, kurum land paðra.* Am. 97(99)
- *par monom vér skína sem sól ok ávalt oss una, ok paðra mon Krístr sýna oss alla dýrð sína.* Homil. 49⁸⁴
- *gerist svá brátt, at paðra (=par Jómssv. 68¹⁸) ero konur í borginni 2 nóttom saman eða 3.* Fm. XI, 99¹⁶(85¹²)

以上は Fritzner (1886-96) の各々の項からいくつか引用したが、その意を heðra = hér, paðra = par と彼は定義し、静止の副詞とする通例の分類にのっとっている。しかし Fritzner の同じ見し出の所に Laxd. 84 (233⁵) からの引用がある。

[„vita muntu, at] Bolli ferr heðra at heimboðum⁸⁾;

Cleasby/Vigfusson (1957) は、heðra に “*hither or here*” の訳を与えながらも、どの例が hither, here に相当するかは触れていないが、heðra は方向の副詞としても捉えることができると認識していたと思われる。少なくとも上記の引用にある heðra は、hér よりもむしろ方向性の意を持った副詞であったと言える。

また paðra に関しては、同書にて “*there, an older form = par*” として、そこに thither の訳語を与えていないが、上に引用した Edda の Am. 97(99)⁹⁾ の例文や Fritzner からの次の例文において、

- (a) *par var Adam ok allir höfuðfeðr ok spámenn, paðra var pokusamt.* Heilag. II, 1¹³
- (b) *sigla nú—austr til Holmgarðs ok herja paðra um eyjar ok annes.* Flát. I, 140²²

その用法の中に、私見によれば paðra が現れる直前に、共通して paðra を引き出すべく距離を意識した表現あるいは動詞 (Am. 97(99)は、その前後の文脈から、(a)例では par が、(b)例では sigla) が先行し、paðra に「その方角で、その方面にて」という方向性が認められる。つまり静止の副詞でありながらも、そこに方向の意を帯びていると考えられる。これは

非常に微妙な問題で用例も比較的少ないので早急な結論は、勿論控えねばならぬが、*heðra* に並行して *paðra* にも、かつては方向の意が存在していたことが、かすかながらも伺われよう。

heðra/paðra に、わずかではあるが方向の意が感じられることは言語史的にみて何ら不思議はない。Krause (1948) が、§118 にて誤解を招きやすい記述にせよ、これら *heðra/paðra* を方向の副詞の系列に配置したのは故がなくもなかった。記述的な文法としては、これらの副詞は静止の系列に置かれるべきものだが、Krause は語源的解釈に基づいて、方向の副詞の系列に並べたのである。この点 Boer (1920) は、§278. Aanm. 2 において、次のように *hér/par* と *heðra/paðra* を明解に述べている。

Naast *par* en *hér* komen voor *paðra* en *heðra*, oorspronkelijk zeker alleen in den zin 'daarheen' resp. 'hierheen' (vgl. go. *hi-dre*), maar in de bronnen in gelijken zin gebruikt als *par*, *hér*.

従って上で論述したように、*heðra/paðra* にたとえわずかにせよ、その中に方向性の意が残留していたのは偶然ではなかった。そこで *heðra/paðra* の成立背景を知るため語源辞典にあたると、

Holthausen (1948) :

- *heðra* 'hier', lat. *citrā* 'diesseits' s. *heðan*, *hiðra*
- *hiðra* 'hier' (poet.) go. *hidrê*, ae. *hider*, ne *hither*, lat. *citrō* 'hierher' s. *heðra*, *heðan*, *hér*, *hinnig*
- *paðra* 'da, dort' go. *paþrō* 'von da', ae. *ðæder* 'dorthin', ai. *tátra* 'dort(hin)'

de Vries (1977) :

- *heðra* 'hier' run. schw. *hederA* (Stentoften c. 620, Jacobsen-Moltke Nr 357), *hAiderA* (Björketorp c. 650, ibid, Nr 360) —got. *hidrê*, ae. *hider*. —lat. *citrā* 'diesseits', *citrō*, 'hierher.' Diese formen lassen germ. **hipra* erwarten, dass dann unter einfluss von *heðan* zu *heðra* umgebildet wurde—vgl.

hinn und hér

- ・ *paðra* adv. 'da, dort.' got. *paþrō*, 'von da,' ae. *ðæder* 'dorthin' — ai. *tátra* 'dorthin' — Neben got. *paþrō* steht *hidrē* aus idg. ablativ-endung *-ēd*, *-ōd*

Holthausen は、*hiðra*, *heðra* と二つの見出しを挙げ、各々に lat. *citrā*, *citrō* を付しているため *hiðra*, *heðra* が異なる語源に属するかのような不十分な記述であるが、de Vries の説明で両者の関係は氷解する。このことは Kock がすでに、*Svensk ljuhdistoria* III (1916) の §1068 において次のように述べている通りである。

äldsta isl. *hípra* 'här' (jmf. got. *hidrē*): isl. *hepan*, fsv. *hæpan* 'hädan' (senare även isl. *hepra* med *e* frá *hepan*)

このように、代名詞から派生した副詞内部で相互に影響し合って新しい形を出現させている事実を見逃してはならない。(VI, VIII章参照)

de Vries が記載している Stentoften と Björketorp のルーン碑文にみられる *heðra* について触れておかねばならぬ。de Vries はこれらを run. schw. (runsvenska, 約800年～約1225年)⁷⁾ として分類している。これら二碑文の年代について様々な説があるが、800年以降に据えている学者は一人もない¹⁰⁾。しかもヴァイキング時代の典型的な16文字タイプではないので一概に run. schw. としてしまうには問題がある。時代的には、両碑文とも共通ノルド祖語時代の末期に属しており、run. schw. への過渡期的存在と言えるであろう¹¹⁾。

Stentoften 碑文も、また年代的にはこれよりやや新しい Björketorp 碑文もスウェーデンの南部 Blekinge にあり、両者共に呪文的内容がこめられている¹²⁾。その中で *heðra* を含んでいる部分を取り出すと (Krause 1966, I Text, s. 210, 214),

Stentoften

V : hiderRunonofelAhekAhederAginoronOR

Björketorp

B- I: hAidRrunoronu

II: fAlAhAkhaiderAg¹³⁾

細かい点には多少解釈上の問題があるにせよ、heðra を含む文に関しては両碑文共、同じ内容であり、Krause (1971. s. 140f.) によれば、この部分を古アで “heið(r)-rúna falk heðra, ginn-rúnar.” とし、その訳に “Der Glanzrunen Reihe barg hier ich, magisch wirkende Runen.” を付している。Jansson (1963) も “Måktiga runors hemlighet dolde jag här, kraftfulla runor.” (s. 25) と訳しているように、これら二碑文に出てくる heðra に、静止の副詞の意を与えるのが一般的であるが、heðra を「ここへ (→石の中へと彫り込んで) 隠した。」と解釈すれば、この中に方向性の意を汲みとることができなくもない。Antonsen (1975) は上記の個所を “The sequence of bright-runes I commit here [i. e. to this stone], mighty-runes.” (s. 88) とし、hederA の語源 (彼自身が付したその語源解釈 (s. 86) の妥当性は別として) に基づく意に忠実に訳し、heðra の中に方向の意を読みとろうとしているように思われる。共通ノルド祖語時代からの碑文において、筆者が知る限り、heðra が出てくるのは上の二例のみ、¹⁴⁾ paðra は一例もないという状態で、かように限られた例からは、静止か方向かの判断を下すのは、はなはだ困難であるが、古アで大方 heðra ⇒ hér, paðra ⇒ þar と合流がほぼ完了していたことから、この時代では、heðra/paðra は、時に静止、時に方向の意を兼ね、次第に一本化へ向う途中ではなかったかと思われる。東ノルド語の地域で heðra が出たのはこの時代のみで、以後13世紀から現れ始めるラテン文字で書かれた数々の法律書からはその姿を全く消してしまっている。

heðra/paðra に方向性の意が、かつては存在したであろうことを、今までいくつかの例を挙げながら明らかにしようと試みたわけだが、ここではその裏付けとして、更にゴート語の空間の副詞を例示してみよう。Braune/Ebbinghaus (1973) §213 のリストより、

hēr ~ *hidrē* ~ (*paprô* von hier)
par ~ **pap* nur im rel. Adv. *padei* ~ *paprô*
var ~ *lvap*, *lvadrē* ~ *lvaprô*

北欧語全体でも一致していた静止の副詞は、ゴート語のそれとも合致し、ゲルマン語全体に渡って共通である。一方出発点の副詞に関しては、北・西ゲルマン語の -an に対し、東ゲルマン語のゴート語は、*hindana* を除いては、接尾辞が -*prô* であることは興味深い。どちらが innovation であるか、あるいは共に祖語から受け継いできたのかは、俄に決め難いが、この特徴において、北・西ゲルマン語に対し東ゲルマン語という isogloss の追加も考えられる。この点においては、Voyles (1968) の主張を強化する形になるが、ゲルマン諸語の分類には数々の難点を含んでおり、全体的な特徴をも考慮に入れなければならないが、それでも問題は決着したとは言えない。¹⁵⁾

ゴート語の方向の副詞には、-*p* と -*drē* で終るのと二通りある。-*p* で終る副詞のうち、*hidrē* に相当する副詞は欠如しており、存在していたとしたら、**hip* が再建されるであろう。この -*p* の語源は Feist (1939) の *lvap* の項にて、ギリシャ語の *πόσε* “*whin?*” と比較せられて idg. Suffix -**te* にさかのぼるといふ。ゴート語 *aljap*: ギリシャ語 *ἄλλο-σε* “*anders wohin*” からも -**te* に方向性を示す機能が存在していたことが明らかで、この語源は正しいであろう。¹⁶⁾

さて -*drē* については、Feist (1939) は *hidrē* の項にて古ア *heðra*, 古英 *hider* と比較関連付けて、

Abgel. vom germ. Pron.-St. *hi-* mit einem zu dem Suffix in *alja-pro* (s. d.) in Ablaut und gramm. Wechsel stehenden idg. Suffix -*tro-* (im Abl. oder Instrum? vgl. E. Kieckers, Got. Gramm. 170f.).

更に *lvadrē* の項にて、この -*drē* を

Mit betontem Suffix -*dre* (auch in *hidre* ᾠδε hierher, *jaindre*

ἐκεῖ dorthin, ablautend in *sundro* besonders und mit Stammbetonung in *aljapro ἀλλὰλόθεν*, anderswoher, *hwapro πόθεν*; woher?, *jainpro ἐκεῖθεν* dorthier, *papro ἐντεῖθεν* daher) gebildet von germ. Pron. -St. *hva-*(s. u. *hvas*).

この語源からでは Ablativ-*ēd* (cf. de Vries (1977) の *paðra* の項) と解され、方向性の意を求めるのには難点があり、Kieckers (1928 s. 170f.) は -*é* を Instr. (der Raumerstreckung) と取り、-*drē* の schleifende Intonation は、対になっている -*prō* から移ってきたものとするのに対して、Schmidt (1962) は、§16~30 において、-*drē* は idg. *-*tre* (cf. aind. *á-tra*, *tá-tra*) が、Postposition=Partikel idg. **ē* (aind., av. *ā*) によって拡張されたものとみなして、Kieckers の方向性及び Intonation の不十分な点を同時に解決しようとするもので注目に価する。このように -*drē* には始めから方向の意があった。

古ア *heðra* は、各々に方向性を持ったゴート語 *hidrē*、古英 *hider* と語源を一にすることが分った。*hadrē* も Feist により、方向性の意を示す古英の *hwæder*, *hwider* と同語源であることから、

ゴート語	古ア	古英
<i>hidrē</i>	— <i>heðra</i>	— <i>hider</i>
①	— <i>paðra</i>	— <i>pider</i>
<i>hadrē</i>	— ②	— <i>hwider</i>

上のような対応表が作れる。ゴート語の ①に関しては、Feist の *paprō* の項や Schmidt (1962) §16にあるように、**padrē* が再建できるし、②もこれにならって、**hvaðra* が期待できるが、この形は文献には存在しない。*heðra/paðra* よりも早くに失なわれたためか、あるいは別の理由によるかは不明である。(VII章参照)

従ってゲルマン語の歴史比較文法の示す所によれば、古アの *heðra/paðra* は元来方向の意を持つ副詞であった。

IV. heðra/paðra と hingat/pangat・pingat について

heðra/paðra が、その意を共通ノルド祖語末期に hér/par へと移していったことはすでに述べた。この heðra/paðra に方向の意が薄れると、その機能を受け継ぐべき方向性を示す新しい語が必要となってきた。そこで新たに形成された語として、Boer (1920) は、§278,2 で次のような語を挙げている。

Nieuwe formaties zijn talrijk: *hinnig*, *hinnug* uit en naast *hinnveg*, 'ginds.' *pannig*, -*ug*,¹⁸⁾ 'daarhen.' *hingat*, *hegat*, *hígat* uit *hinn veg at*, 'hierheen.' *pangat*, *pagat*, 'daarhen.'

-n- を欠く *hegat* や *pagat* は後述するとして、*hingat* タイプ¹⁹⁾は古期東・西ノルド語に共通して存在していたことは、II章で指摘した通りである。従って *hingat* タイプの語が、東・西ノルド語に方言的に分岐する以前に、すなわち共通ノルド祖語末期には形成されていたと想定して何の差支えもない。すると heðra/paðra が、方向の意を失った頃と *hingat* 等が成立した時期とが年代的に一致する。heðra/paðra が放棄した方向の機能の間隙を、上に挙げたいくつかの候補的な語のうち、特に *hingat* タイプがその代表となって埋めていったのであろう。

V. hit/dit について

まず *hit/dit* の語源であるが、Hellquist (1970) によると

- *dit*, fsv. *pít*=fda. *pít*, da. *did*; av **pī-at*, jfr ösv. dial. **diât* (*tiot*), av ie. *tei-*, lokat. *till den* (det); jfr grek. *teĩ-de*, +*ad*, germ. *at* (se *át*); jfr fsv. *pingat*, *píghat*, isl. *pangat*, *dit*, o. *hit*.
- *hit*=fsv., da.=fno. *hit*; av **hī-at*, av ie. *kei-*=grek. (e)*keĩ*, där, lokativ *till pronominalstammen ke-*, *ki-* osv. (i t.ex. lat. *cis*, på andra sidan, got. *hita*, detta, fhty. *hiutu*, av *hiutagu*

[ty. heute], i dag) + ie. *ad* = germ. *at* (= sv. *åt*, prep. o. adv.);
jfr fsv., isl. *hingat*, *higat*, *hit*, o. *dit*.

この語源を最初に提起したのは A. Noreen (ANF 6. 1890, s. 373~374) である。語源に関して鋭い洞察力を持っていた Tamm は, (1899) s. 35 及び (1890~1905) にて, この説に “troligen” 「恐らく」を付加する慎重さを示し, 次いで SAOB も *dit* の項にて “sannolikt” 「多分」を記している一方, Falk-Torp (1903) 及び (1910), Torp (1919), 上に挙げた Hellquist (1970), Holthausen (1948), Wessén (1961), de Vries (1977), 新しくは Nielsen (1969) も, 全面的に Noreen 説を受け入れた形で各々の語源辞典に掲載している。筆者の知る限り, Noreen 説が出されて以来, これに反論・批判が加えられたことはなかった。Noreen とは学説において, しばしば対立した A. Kock できえ, *Svensk ljudhistoria* V:1 (1923) §2139 で, これを完全に認めている。

筆者は次のような点から今一度この語源を洗い直す必要があると考える。

前要素の **hi*, **pi* を形態上 *lokativ* と解することに異存はないが, 問題はゲルマン語で痕跡的にしか残っていない代名詞の *lokativ* に, 具体的な場所を明示した形跡は一つもない。Noreen が例示している起源的に *lokativ* とみなされるゴート語の *pei*²⁰⁾ は, “1) relat. (-*patei*) nach *patabah*, *pišvah* usw. 2) conj. daß, damit.” で具体的に場所を意味していない。Streitberg (1896. s. 273) によると, ゴート語の *pei* と古ア *p(v)i* とは同一として, *hvi* とともに古い *lokativ* であるとするが, *p(v)i* “therefore” にも疑問詞 *hvi* “why” にも, またこれとの合成語 *hvi-likr* “[*Lat*] *qualis*,” *pvi-likr* “such” や接続詞として使用される *pvi at* “because” にも, 場所を示す意は見出せない。*lokativ* の **pi* がギリシャ語の方言 *dor. thess. τειθε* “hier” と同語源とすれば, 当然 **pi*, **hi* は静止の副詞であることになるが, 実際には序でもみたように, ゲルマン語全体に静止の副詞として *hēr/par* が古くから根強く存在しており, ゲルマン祖語

に *hī, *pī が具体的な場所を呈示する静止の副詞として並存する余地は無かったものと思われる。ここで百歩譲って、*hī, *pī に具体的な場所を示す機能が残っていたと仮定するなら、*hī-at, *pī-at はゲルマン語の格の Synkretismus を起こす以前、遅くとも共通ノルド祖語時代の初期以前には形成されていたと考えねばならぬ。後に抬頭してくる hit/dit に直接連なる *hī-at/*pī-at が、かように古くから綿々と存在していたのなら、heðra/paðra の失った方向の意の空所をそのまま満たしていた筈である。もしこの通りであるとすれば、hingat/pangat などの新しい語をわざわざ造り出さねばならなかった理由を見出すのは困難になるばかりでなく、歴大な資料を有する古アから hit/pit が存在していた痕跡さえ見つかからないのは、極めて奇妙だと言わざるを得ない。よって hit/dit の古さ、すなわち Noreen の語源説は退けねばならぬ。

まず古期スウェーデン語において、ラテン文字で書かれた最古層の文献、すなわち地方法の語彙を集めた Schlyter (1877) 及び Äldre västgötalagen の語彙を調査した H. Pipping (1913) によると、Äldre västgötalagen (これら地方法の中で一番古いとされ、その完全なる写本は1280年代) では、hingat は一例のみで、hit はなく、また pingat は、Västgötalagen, Gotlandslagen, Skånelagen, Magnus Erikssons Landslag の四法律書に現れるのに対し、pit は広範囲に渡ってみられる。更に上記の法律書よりはやや遅れて書かれた Erikskrönikan (写本は1400年代中頃、しかしその言語は勿論それ以前を反映している) では、R. Pipping (1919) によるとその頻度数は次のようである。

hingat	1	hit	4
thingat	3	thit	40
tighat	2		

少ない資料からではあるが、現代スウェーデン語からも、hingat/pingat がその姿を消してしまっていることから、hit/dit が新しく急速に抬頭し始めて、hingat/pingat が衰退しつつあることを物語っていると解釈でき

よう。

古アには、hit/pit の形跡が存在しないことは前に述べたが、Falk-Torp (1910) は、*Did* の語源を説く前に、これを次のような形で指摘している。

Did (dorthin), schw. *dit*, altdän. und aschw. *pit*; das wort findet sich nicht im klassischen anord., dagegen im mittelnorw. dial. (*dit*).

よってここで、hit/pit が古アには無かったことが明言されている一方で、中世ノルウェー語方言には存在していたことが伺われる。この辞書の底本となった同著者たちの (1903) 版では、

Did, sv. *dit*, oldd. og osv. *pit*; ordet findes ikke i klassisk oldn., derimod i Dpl. Norv. og i n. dial. (*dit*).

とあるように、上の mittelnorw. dial (中世ノルウェー語方言) の個所を、Dpl. Norv. として出典を明示している。そこで Fritznér (1886-1896) の *pit* の項をみると、その例は、DN. (= Diplomatarium Norvegicum, すなわち Dpl. Norv のこと) I, 545. VII, 360. X, 89, 170. とあるように、ことごとく DN. が出典である。hit も Fritznér によると、*pit* の場合と同様、その例の出典は、DN. VIII, 194¹⁹ である。Cleasby/Vigfusson (1957, s. XII) は、この DN. を指して “but as the language of Norway was no longer in a pure state in the 14th and 15th centuries,…” としているところから、Tamm (1890-1905) が hit について、“fsv. *hit*, motsv. fno. *hit* (sällsynt, kanske lánat), da. *hid* hit.” と述べ、借用の可能性ありとしたのも十分にうなずける。従って hit も、またそれと並行する *pit* も、古くはノルウェー語にも存在しなかったと言えよう。

するとどこから借用されたのであろうか。古期ノルウェー語にも古アにも (すなわち古期西ノルド語には)、hit/pit は存在しなかったことから、当然その答えは、Falk-Torp (1903) の *hid* の項にある、“sen oldn. *hit*

(indkommet fra østnordisk)” 以外は考えられない。つまり hit/pit は、古期東ノルド語特有の副詞であったと言えるが、Torp (1919) は、hit の項で更に一步進めて、“Vel fra sv. (sv. *hit*, da. *hid*)” とその借用先をスウェーデン語にまで絞っている。Torp がスウェーデン語と名指した詳しい理由は不明であるが、先に指摘した古ス(特に äldre fornsvenska) 期に(あるいはすでにそれよりやや以前から)、hit/pit が急激に広まり始めたことを考え合わせれば、Torp の言は極めて重みがあり両語ともスウェーデン語からの借用とする見方には十分説得力がある。

Noreen 説の大きな難点は、lokativ *hī/*pī を想定することにより、必然的にその形成時期が極端に古くなってしまうことにある。しかし hit/pit の成立を新しいとすれば、つまり古スの äldre fornsvenska 期の初め(約1225年)よりやや以前に成立したと考えればこの障害は取り除かれる。すなわち hingat 等が形成された共通ノルド祖語末期以前には、未だ存在していなかったと推論するわけである。

すると hit/pit が形成されたとする年代より古いノルウェーの Eggjum ルーン碑文の中にある hi を基にした反論が出てこよう。

Krause (1971 s.143f.)に従って、問題の個所を引用すると

huwar ob kam harisa hi a lat gotna ?

彼はこれに相当する古アを “*hver (=hverr) of kom herj-áss (oder : her-áss) *hí (=heðra) á land gotna?” とし、その訳は “Als wer (=in welcher gestalt?) ist der Heer-Ase (=Odin?) gekommen hierher auf das Land der Krieger?” としている。この碑文全体にわたって、その解釈に多くの問題を含んでいるが、²²⁾ここではこの hi のみに焦点をあてることにする。この hi が場所を示すことは、ほぼ確実であるが、どう解釈すべきかは未だ完全に一致をみたわけではない。

さて問題の hi についてであるが、Krause (1971) は上のように hí (=heðra) とし、その独訳では方向の副詞 hierher とする一方、別書(1966, I Text s.231)においては “hí „hier“ sonst nur bezeugt in

aschwed. *hit* (<*hi-at*) „hierher,“ として *hi* を静止の副詞と理解しているように思われる。その理由を Krause は述べていないが, Noreen 説批判の際に触れたように, *hér* との関係からも, 静止の副詞 **hī* 自体の存在が極めて疑わしく, 碑文の *hi* をこれに当てることは, 当然受け入れがたい。更に, この *hi* を, Jóhannesson (1923, s.84.) の如く, “**hi* (‘hierher’, Adverb vom alten Stamme **hi*, **hi*=alter Lokativ, vgl. altschwed. *hit* <*hi-at*)” とし, 元来いわゆる 静止の副詞 **hī*(?) を方向性の意にまで括げることには相当の飛躍がある。またもし Noreen 説が正しければ, ここに恐らく *hi* でなく, **hiat* そのものがあつたかもしれない。Jóhannesson (1923 s.82), Noreen (1923 s.377), Krause (1971 s.143) は, Eggjum 碑文の年代を700年頃, これに対して v. Friesen (1933) は s.24 にて

Dess språkform är synnerligen ungdomlig, praktiskt taget de äldsta handskrifternas, och även runornas former—21 runtyper äro representerade—liksom deras bruk hänvisa till den äldre runradens allra sista skede och övergången till den 16-typiga fu-tharken, snarare mitten eller senare delen av 700-talet än dess början.

としてルーン文字の使い方やその言語的特徴が, かなり新しいことから, 年代を8世紀後半まで下げている。そのため相当古いと推定されるNoreen 説の **hī* と Eggjum の *hi* とが同一である可能性は一層遠のく。因みに, この *hi* を含んでいる Eggjum 碑文の成立を700年頃と早めてみても, *heðra* を含んだ Stentoften や Björketorp の両碑文¹⁰⁾より新しい。Eggjum のあるノルウェーの Sogn og Fjordane と後の二碑文のあるスウェーデンの Blekinge とは地理的に離れてはいるが, 700年前後に静止の副詞に *hér* と *heðra* (勿論方向の意も, 未だ残っていたことであろう) に加えて, 更に **hī* も存在したとは考えにくい。このような問題点を勿論意識せずして, Kiil (1955) は s.164-169 で, この個所を

huWAR ob kam hARME a hialat gotna=hverr of kom hermi á
hjá-land gotna

と読み “Hvem satte ‘utsognet’ på renne-teigen?” として、この難点を避けた形で、異なった解釈を打ち出している。とはいえ多くの学者が、この hi に場所の副詞を当てようと試みたのは、あながち誤りではない。

少なくともこの hi の解釈に関して、筆者はもう一つの可能性があると考ええる。その前に Streitberg (1914) の論文 Zur gotischen Grammatik の中の 1. *qiman in* und Verwandtes (s.217~224) を見てみよう。

Daß die Ruhekonstruktion bei *qiman* wesentlich häufiger ist als Richtungskonstruktion, befremdet nicht: *qiman* ist ein perfektives Verbum d.h. es bezeichnet die Handlung im Hinblick auf den Moment ihrer Vollendung. (s.217) とまず問題提起した上で、*qiman* が完了性を含む動詞とし、*in*+Dativ の例として、Joh. 9,39 *jah qap Iesus: du stauai ik in þamma fairþau qam.* 等、*in*+Akkusativ の例として Joh. 6,14 *qepun þatei sa ist bi sunjai þraufetus sa qimanda in þo manaseþ.* 等、(s.218) を挙げ、次のような定義を与えている。

Wir können also den Unterschied zwischen den beiden Konstruktionsmöglichkeiten folgendermaßen definieren: wo es im Zusammenhang lediglich auf den Moment der Vollendung ankommt (und das ist für das Sprachgefühl des Goten die Regel), wird *qiman* mit *in* und dem Dativ verbunden; wo aber für den Zusammenhang neben dem Moment der Vollendung auch die Bewegung in Betracht kommt, wo sie ins Blickfeld des Sprechenden tritt, steht bei *qiman in* mit dem Akkusativ. (s.219)

更に過去形に関しては、

Besonders zahlreich, wie das in der Natur der Dinge liegt, sind die Ruhekonstruktionen bei den Formen der Vergangenheit: die

Handlung ist abgeschlossen, die Aufmerksamkeit richtet sich daher vor allem auf den Moment des Abschlusses. (s.221)

と卓見を述べている。Streitberg の説を更に展開させるなら, in+Dat—(静止)→hēr, in+Akk—(方向)→hidrē と, 場所の副詞へと置き換えることができよう。すると qiman は, hēr にも hidrē にも結びつくわけである。qiman+hidrē の実例は, 限られた資料からは一つも見当たらないにしても, 理論的には十分考えられる。一方 qiman+hēr の用例は調べた限りで,

jah sai, hropidedun qipandans: hva uns jah pus, Iesu, sunau gudis ? qamt her faur mel balwjan unsis ? (Mat. 8,29)

jah bigetun ina hindar marein qepunuk du imma: robbei, huan her qamt ? (Joh. 6,25)

jah pan auk ik manna im uf waldufnja gasatids, habands uf mis silbin gadrauhtins; jah qipa du pamma: gagg, jah gaggid; jah anparamma: qim her, jah qimid; jah du skalka meinamma: tawei pata, jah taujid. (Luk. 7,8)

の三例がある。うち最初の二例の qam は過去形で Streitberg 説に合致している。三番目の問題の個所の qim は命令形である。hēr が他の移動の意の動詞と組んでいる用いられている例は, 次の個所しかないが,

appan swepauh fijands meinans jainans, paiei ni wildedun mik piudanon ufar sis, briggip her jah usqimip faura mis. (Luk. 19,27)

この briggip も命令形で, Streitberg の上記 (s.221) の die Handlung ... の項の視点を未来に移した形で理解すれば, 移動動詞の命令形+hēr も彼の説にかなっていることが納得²⁴⁾できる。

Streitberg は, in+Dat, in+Akk の違いを定義している上掲の個所で (s.219), qiman in+Dat の際の説明に “das Sprachgefühl des Goten” と付記しているが, 次に述べるように, 必ずしもゴート族の言語感情に限

られていたわけではなかったと思われる。

古アの Edda 詩においても、Gering (1903) の *hér* の項(2)で、*hierher* (*bei verbis der bewegung*) を当てる例が 12 (うち 8 例が *koma* と共に) あり、そのうち二例ほど挙げるなら

- *hér kwam Þjóprekr meþ þria tógo.* (Gpr. III 5¹)
- *Jarpar burr es hér nú inn komenn.* (Ls. 58¹)

後の例のように、過去分詞 *komenn* と共に用いられている例が、半数を占めている。このように *hér* が完了形と結びつくのは Streitberg (s. 218 ~219) の

Bei den Stellen der ersten Gruppe (=in+Dat の場合：筆者付記) ist die ganze Aufmerksamkeit auf den Moment der schon eingetretenen Vollendung konzentriert, die diesem Moment vorausgegangene Bewegungshandlung ist bedeutungslos: …

からも明らかである。

hingat は 7 例あって、移動の意の動詞と結びつくのは当然であるが、うち *koma* と結びついているのは次の二例のみ。

- *komenn es hingat konr Sigmundar.* (Rm. 13¹)
- *konor hugpak daupar koma í nótt hingat.* (Am. 25¹).

Rm. 13¹ は、完了形+*hingat* で上記の原則を逸脱しているが、Am. 25¹ は未来のことであるから別に問題はない。従って Streitberg の主張を更に展開した説は、古アでもほぼ当てはまる。

また古スでも Söderwall (1884-1973) の *här* の項にて、

- *hafpe þin kona här comit.* (Bu. 19)

と完了形で、同様の例が Flores och Blanzeflor, Herr Ivan Lejon-Riddaren にみられ、合わせて 7 例あると言う。*koma*+*hingat* には *Komom vi alle hingat.* (KL. 386) があがっている。

以上から Streitberg の原則は、(ゴート語) *hēr*: *hidrē*, (古期ノルド語) *hér*: *hingat* の場所の副詞にも敷衍され、更にこのことはゴート語ば

かりでなく、古期東・西ノルド語にも適用できることが分った。(もし西ゲルマン語にも認められるなら、ゲルマン祖語の syntax 上の古い特徴と言えるであろう。)ここでは古期東・西ノルド語に生きていたこの特徴が、少なくとも共通ノルド祖語にも有効であったことは容易に推察できる。

これを踏まえて、今一度 Eggjum 碑文を見てみよう。≫ huwar ob kam hARISA hi a lat gotna? ≪ で動詞に過去形の kam, それに “ob = aisl. *of als perfektivierendes Präverb.*”²⁵⁾ (Krause 1971, §55,5) と揃えば, hi は必然的に静止の副詞と考えざるをえない。hi 中の i 音価について考えてみるに、同碑文の始めに四つの否定辞 ni が登場している。複数の否定辞が重なった場合²⁶⁾, Krause (1971, s.143) の如く “ni (so got., ahd.) kaum = aisl. *né.*” と取るのが正しい。また i ルーン字に関して v. Friesen (1933, s.45) は, “i-runa återger mot slutet av per. 2 e-ljud, t.ex. ni (=fvn. *né*) Eggjum och uttränger såväl é- som e- runorna.” としているところから, hi は hé と解釈できる。この hé は上で導き出されたように、静止の副詞でなければならない。とすればまさに hé(r) に他ならない。ただ r ルーン字が欠けている難点はあるが、その一説明としてルーン文字が膨まれる際に、誤字や脱字等がよくあるという事実を指摘しておきたい。

よって Noreen 説で再建された *hi は虚像であり、Eggjum の hi は hér と理解するのが、言語史的にみてもより自然であろう。このことは先に推定した hit/pit の成立年代に、何ら障害点をもたらさない。

Streitberg の敷衍説は、古ア・古スにも適用できた。彼のあげる区別 の定義は、ある意味では非常に微妙で、この区分が混同する可能性は、想像に難くない。²⁷⁾ 事実そのような例がすでに Edda 詩の Rm.13¹ にあったことは、上で指摘した通りである。方向の heðra が、静止の hér にその意を合流させた原因は詳らかではないが、少なくともその一起因あるいはこれを促進させた一要因は、Streitberg の定義の微妙性と無関係ではなかったであろう。

VI. hit/dit の語源

Noreen の想定する lokativ *hi/*pi を前章で否定した。と同時に hit/pit の成立時期を、「hingat の形成以後」と「äldre fornsvenska の初めよりやや以前」との間と限定できた。それではその起源をどこに求めるべきか。その鍵は Noreen 説に先立つ Rydqvist (1874) V. s. 94 の “*hit och pit, sjelfva sammandragningar af förut sammandragna hingat och pingat.*” の中に提示され、Kock (1886) II, s. 406. もこれを受けて “Vokalförlängningen i *geen* är ersättningsförlängning vid förlust af *g* (isl. *gegn*), och äfven i adv. *hiit* är väl vokallängden att förklara på liknande sätt (jmf. isl. *hingat*). Denna bestyrkes af skrifvningen *hijt* (Vgl. III, 99) och *pijt* (t. ex. Södermannalagen, se glossaret; jmf. isl. *pi(n)gat*).” とまで説明しているながら、後にこれを放棄して Noreen 説に従ったことは、V章の始めで述べた。Rydqvist の示唆を十分発展させることなく、Noreen 説が定着してしまつたことは残念であつた。

そこでまず始めに、hingat/pingat, higat/pigat 等の各語形を Fritzner (1886-1896), Schlyter (1877) から拾つて、古ア・古ス別にしてみると、

*hinn-veg-at	→	{	hingat (古ア, 古ス), higat (古ア, 古ス)
		}	hængat (古ス),
			hegat (古ア)
*pann-veg-at	→	{	pangat (古ア), pagat (古ア)
		}	pengat (古ア, 古ス), pegat (古ア)
			pingat (古ア, 古ス), pighat (古ス) ²⁸⁾
			thiat (古ス)

ここで母音価が、やや食い違っていることについて付記しておこう。pangat の -a- は語源に忠実な形であるが、pengat の -e- は Noreen (1923) §162, 1, Anm. で述べているように pann 対する penn, poenn

(両語とも Kock 1906, I. §261 参照) になったため、pingat の-i- は、hingat からの影響である。hængat は、Kock (1906) I, §54 によると “genom påvärkan av *pøengat (jmf. fg. pengat) ‘dit’.” で相互に相乗的に影響し合って新しい形を現出させている。²⁹⁾

次に -n- のない形について、Sturtevant (1930, s.237) が hegat の -e- を説明するのに、higat における “a-umlaut of *i*” としているのは誤りであろう。Sturtevant はこの中で hingat > higat を仮定していることから、higat はむしろ新しい形で、これに umlaut 中で一番古いとされ、その例も少ない a-umlaut で、この -e- を説明するには無理がある。それでは hegat をいかに解釈するかは、部分的に Sturtevant 自身がその手掛りを与えている。すなわち pangat から直接に pagat, 同様に pengat > pegat, pingat > pighat, hingat > higat, *hængat (cf. hængat) > hegat とすれば、これら母音の相違は難なく説明できる。

heðra/paðra の跡を受け継いだのは hingat/pangat であった。また hīt/pīt は、hingat/pangat よりも新しい形であることも述べた。そして前章で hīt/pīt の成立年代 (dating) を、「hingat/pangat の形成以後」(terminus post quem), 「äldre fornsvenska 初期 (約1225年) よりやや以前」(terminus ante quem) と限定できた。これらの点をすべて満たす解決策として、Sturtevant の説を更に延長させて次のような変化過程が仮定できるであろう。

hingat > higat > hīt, pingat > pigat > pīt

すなわち n 脱落、次に g 消失と二段階にわたって変化を遂げたとするわけである。

(1) **n の脱落**. この音的環境における n 脱落は、確かにその他の例を数多く見出すのは困難であるが、ここにアクセントが絡んでいたとする Sturtevant (1930, s.237) の主張は、傾聴に値する。

But the -n- in *pa-n-gat* : *hi-n-gat* could not have phonetically disappeared in a stressed syllable nor do we have any pattern

whereby this disappearance can be explained by analogy.

It is therefore possible that the forms *pagat* : *higat* represent the regular forms *pangat* : *hingat* in unstressed¹ position with the loss of *n* before *g* due to the lessened force of articulation; cf. *gefit* < **gefin-t*, where **nt* appears in an unstressed syllable.

The synonymous adverbial forms *pann-ig* (<**pann-veg*) and *hinn-ig* (<**hinn-veg*) appear as *pan-ig* and *hin-ig* with the loss of one *n* (simplification of the gemination), which can be explained only as due to the fact that the adverb here stood in an unstressed position.²

¹ Although the forms *pagat* : *higat* may have developed in unstressed position, they *appear* in both stressed and unstressed position.

² Cf. Noreen, *Aisl. Gramm.*, §285.

Ottelin (1900, I. s. 90) も svagtonig ställning に限定されれば, *n* 脱落はありうるとほのめかしている。これを受けて Olson (1904) は §48, 8), b), にてアクセントの弱い音節で生ずる *n* 脱落の例を挙げて, 次のような判断を下している。

I alla de i Ög förekommande fallen [例, 筆者付記 = *attug*, *fiar-pugx*, *gagær*, *lioga* (*ping*), *siattugx*, *pigx*] har det saknade *n* (*η*) stått i relativt oakcentuerad stafvelse, hvilket stämmer väl med Ottelins formulering af ljudlagen, Cod. Bur., s. 90. (→上述).

更に *higat/pigat* にアクセントが無かったことを裏付ける証拠として, ここに *a-brytning* が欠落していることである。一般に古期東ノルド語の方が, 古期西ノルド語に比して *brytning* を多く起しており, これが生ずる条件は, “Die brechung scheint nur in haupttoniger silbe stattzufinden.” (Noreen 1904, §76, 2) であるにもかかわらず, それを満た

す *hiagat(?)~*hiägat(?), *piagat(?)~*piägat(?) の例が古期東ノルド語にさえ、一つも実在しないことは、“In schwachtoniger silbe tritt keine brechung ein.” (Noreen 1923, §94) に他ならない。higat/pigat 等は、アクセントが無かった位置で生じた形であると確定できる。(VIII 章参照)

(2) **g の消失** n 脱落で生じた ³⁰⁾higat 等は、更に g 消失を受けることになるが、以前にも繰返したように古期西ノルド語には元来 hit/pit は存在しなかった。従ってこの g 消失は、古期東ノルド語内での現象でなければならない。その際47頁の表からも明らかなように、higat タイプにおいて、-a- 及び -e- 音価は古アに限定されているのに対し、古スでは双方の副詞共、-i- 音価のみであった事実も考慮に入れねばならぬ。Noreen (1890) は、s. 358 で次のような重要な事実を指摘している。

... *piat*, en färm som träffas i flera codd. av Skånelagen (Schlyter s. 60 not 42, s. 122 not 29), skriven *thiat*; ...

この Skånelagen=[デ] Skånske lov に、古期デンマーク語の特徴があることは否めない。³²⁾するとデンマークを中心にして生じた次の音変化に注目せざるを得ない。Bandle (1973) s. 72 に、

Noch bevor *p t k* im Dän. zu Reibelauten wurden, d. h. vor 1200, muß die «*Öffnung*» von spirantischem *g* > *u* nach velaren, *i* nach palatalen Vokal eingesetzt haben;³³⁾

Skånelagen の一番古い写本でも1250年は下らないことから、この音変化がすでに、すなわち Bandle の述べるように、1200年以前に生じていたと考えられる。更に同じ音変化について言及している Brøndum-Nielsen (1968) II §309 の冒頭に “Om Bortfald efter *i*, *u* (med Udviklingen igh>ij>ï, ugh>uw>ǔ)”, とあることから、その変化過程は、*pigat>*pijat>*piat³⁴⁾ となり、この最後の語形が Skånelagen に、*piat* としてその姿を現している³⁵⁾と解せられる。引続き fallande diftong³⁶⁾ のために、a が弱まり脱落して pit が形成されたと考えられる。(a 脱落に関しては、Noreen (1890, s. 373) の例示する説明でも、同じ結果が得られる。)

音変化の最終段階である g 消失は、1200年より前であることは、先にあげた hit/pit の成立年代 (datering) とも合致し、terminus ante quem が年数的に確定できた上、kronologi に何の支障もきたすことなく、仮定した変化過程が説明できた。

古アに hegat, pegat 等あったが、g の音変化はデンマーク及びスウェーデン南部が中心であったため、これ以上変化を遂げることはなかった。Erikskrönikan に出てくる hit や hingat の頻度数からも分るように、また Bandle (1973) の s. 72f. 及びそれに付随する Karte 15 によると、g の音変化は、更にノルウェーの一部、スウェーデンでは Götaland にも深く入りこんでいることから、この音変化をこうむった地域を起点として、hit/pit は短期間に急速に大陸スカンディナビア各地に広まったものと思われる。hit/pit を、かように早く古スに定着させた一要因として、単音節で長母音+t という同じ構成をもつ方向の副詞 üt からの影響もあったと十分考えられる。またこのような背景には、hit/pit が短い語であることから hingat/pingat や hingat/pingat の口語体であった可能性も無視できない。³⁷⁾

hit/pit は、大陸スカンディナビアに広がった innovation であった。出発点の副詞 -frán/-fra/-frá タイプは、後に大陸スカンディナビア・フェロー諸島と他方アイスランドとを分断する isogloss を形成することになるが、方向の副詞のうち hit/dit の isogloss は、これを先取りしていた。ただ疑問副詞の hvert, hwart を除いては。

VII. 古ア hvert, 古ス hwart について

今一度ここで Noreen 説に戻って見よう。彼の主張する lokativ *hī/*pī が正しいとするなら、方向の疑問副詞も、これにならって lokativ の *hvi+at > *hvit (?) なる形が生じたであろう。実際にはこのような語は実在せず、逆に Noreen 説の矛盾が別の角度から露呈している。

それでは、hvert, hwart の語源について調べてみよう。Tamm (1899)

s. 34 によると,

Hvart (till *hvar*), fsv. *hwart*, motsv. isl. *huart* (urnord. **hwar-at* ?)

更に Falk-Torp (1910-11) [hvor の項], Torp (1919), Hellquist (1970), Holthausen (1948), Wessén (1961) は, Tamm の記述から, ? を取りはずし, *hvar* (静止の疑問副詞) + preposition *at* と断定している。 *hvar* + *at* > *hvert* と簡単に造語されていたのなら, 他の二副詞もこれに並って *hér* + *at* > **hért*(?) *par* + *at* > **part*(?) と, 問題もなく成立していた筈である。不思議なことに, Noreen (1904 §472, B, 2, Anm. 1) は *ät* 'zu' の項において, "Kaum hierher gehört *hwart* (agutn, *huert*) 'wohin'." と述べ *hvar* + *at* とする語源には懐疑的であった。Noreen がいかなる理由で **hī-at* / **pī-at* の後要素 -*at* を, *hwart* の中に認めようとしなかったのかは不明であるが, その洞察は以下に論ずるように正鵠を射ていた。

ここで古ア *hvert*, 古ス *hwart* において, どちらがより古い母音価を保っているかをまず決めねばならぬ。*hwar* + *at* を主張すれば, 当然 *a* の音価を持つ方が古いことになるが, 上ですでに論駁したように, これは当然受け入れ難い。一方 *e* 音価の方を古いとみなすなら, Wessén (1969) I § 35, 1 にそれを支持する適切な見解を見出すことができる。すなわち,

Kort *ä* öppnas till *a* i ljudförbindelsen *vär*, men i olika utsträckning i olika dialekter, mera östligt än västligt, mer i trycksvag ställning än i tryckstark, mer om *v* föregås av en konsonant (d. v. s. är *u*) än om det är uddljudande. Ex: pron. *hvar* 'varje' (isl. *hverr*). *qvar*, *quärn* och *quarn* f. (isl. *kvern*), *vära* och *vara* (isl. *vera*), *värpa* och *varpa* (isl. *verða*), *natvarper* m. 'nattvard' (isl. *-verðr* 'måltid').

しかも位置的に西にある方言ほど, 古い *ä* (jfr isl. *e*) の音価を保持していることも指摘されている。更に *mer* i trycksvag ställning än i tryckstark に注目すれば, *hvert*: *hvärt* (isl. *hvert*) = *higat*: *hingat* の

図式が出来て、higat がアクセントの弱い位置での音変化の結果であったことをこの方面からも裏付けることができる。従って hvert を始点として、語源を追求せねばならない。

さて heðra/paðra の本来の機能が失われてからその空所を埋める役割を演じたのは、*hinn-veg(-at), *pann-veg(-at) から造られた hingat/pangat や hinnig/pannig であり、前者は現代アイスランド語の hingað/pangað へと連なっているように、このタイプの副詞が前置詞 at を含んでいたためか、次第に方向の意を独占するようになった。後者は veg の意からも読み取れるように、方向すなわち場所を示す副詞としてばかりでなく方法手段の意も兼ね備えていた。

そこで *hinn/pann-veg(-at) と並行して、当然 *hvern-veg(-at) が予想されよう。時代が下るにつれ “how” の意が前面に押し出てきたにせよ、古ア hvernig (<hvern-veg) には方向の意が確かにあった。このことから *hvern-veg-at>*hverngat もかなりの 確実性を以って再建できるが、この推定形が、直接 hvert に連結すると 想定するには少々無理がある。³⁹⁾

そこで *hvaðra 消失後、その後継を担う疑問詞に *hvern-veg(-at) のようなもって回った言い方よりも、引き続き、より単刀直入的な表現が、別の角度から言えば、合成語よりも単一語の方が好まれたと考えられる。一般に、方向を尋ねる場合、方法も意味する veg などを使って疑問辭の意味を狭めるよりは（事実 veg を含んだ hvernig は、時とともに方向の意が失われたことは、上で述べた）むしろ多様な答を包容できる、意味に幅を持った語が要求されたものと思われる。そこで方向の副詞 hingat/pangat の中核を成した veg が、対格であったことに注目して、疑問副詞 hvert の源も対格に求めるのが順当であろう。⁴⁰⁾ 答に予想の出来ない要素を多く含む中から選択し尋ね出すそのような疑問詞に、中性であり、かつ対格でその意が、“which” に相当する語が、浮かび上ってこよう。Cleasby/Vigfusson (1957) の hvert の項に、筆者も妥当と考える次のような記

述が、載せられている。

neut. sing. of *hverr*, used as adv. *whither*, Germ. *wohin*,
interrog.

そしてこの語源は、上述の様々な要求をかなえている。

VIII. フェーロー語の *higar/hagar* について

フェーロー語の語源に関しては、未だに語源辞典が出版されていない状態からして暗中模索の所も少なくない。方向の副詞 *higar/hagar* もその一つと言える。

VI章の *hingat/pangat* のいくつかある二次的な形が誕生する過程に、代名詞から派生した副詞内の相互間の影響が、大きな役割を演じたことはすでに指摘した。更に対蹠的な意味でありながら、極めて近似した語形から成る対句や慣用語（例、古ス *hingat ok pingat* 等）の存在も、この相互影響を増幅させたことは想像に難くない。この点を念頭におきつつ、*higar/hagar* の語源を試みてみよう。

**hinn/pann-veg-at* から生じた副詞は、古期東・西ノルド語に共通してあった。*hingat*, *higat*, a 音価をもつ *pangat*, *pagat* も古アにその例がある。従ってこれらの語が、フェーロー語の古層にも存在したことは、ほぼ確実である。ところでフェーロー語の疑問副詞 *hvar* には、静止の意と同時に方向の意も兼え備えている。他の北歐諸語の古層からかみても、静止の疑問副詞が、方向の意をもそこに組み入れたのは、さほど古いことではなかったと思われる。そこで静止の副詞 *her/har* を後ろに控えたこの *hvar* が窓口となって、末尾の *r* を方向の副詞へと広げたものと思われる。

$$\begin{array}{ccc} \text{her} & & \text{higar} \\ & \searrow \quad \nearrow & \\ & \text{hvar} & \\ & \nearrow \quad \searrow & \\ \text{har} & & \text{hagar} \end{array}$$
 この *higar/hagar* の前段階に **higat*

/**hagat* (*pagat* 参照) が潜んでいたと想定すると、末尾の *t*→*r* は *hvar* を介した *her/har* からの圧力を伴った sound substitution と解することができ、変化の過程を連続的に無理なく説明できよう。その成立経過は

hingat > higat > higar で、さしたる問題はないが、pangat から hagar は難点を含む。その過程については、理論的には、何通りか考えられるが、下述の論議から、蓋然性のある次の四つの変化過程を検討してみよう。

- (1) pangat > hagar
- (2) pangat > hagat > hagar
- (3) pangat > pagat > hagat > hagar
- (4) pangat > hangat > hagat > hagar

p>h はフェーロー語独特でいくつかの品詞に限られた音変化である。これを Barnes (1985, s. 46) は次のように述べている。

Today /h/ for earlier /θ/ is found principally in a set of words in Faroese containing pronouns, adverbs, and proper names in which the first element is a reflex of the Old Scandinavian god name Þórr. (s. 46) [点線筆者付記]

さて p>h が生じた一理由として、先に指摘したように代名詞から派生した副詞内部間での影響にあったとも考えられる。h- を語頭にもつ副詞 hingat (または higat または higar) が、p- を語頭に持つ同類の副詞に analogi で p>h の音変化を強制したと解釈するのである。Barnes (ibid. s. 49) は、

No one, as is indicated at the outset, seems to dispute that /θ/ > /d/ in Danish, Norwegian and Swedish took place under conditions of weak stress. Given that it is very largely the same words in mainland Scandinavian and Faroese that exhibit /d/ and /h/ respectively for earlier /θ/, it seems plausible that in Faroese, as apparently in Icelandic—and possibly in Norn—/θ/ > /h/ also occurred in weakly stressed position.

として、判断を下している。例えばスウェーデン語の場所の副詞 *där* = フェーロー語 *har*, [ス] *dít* = フェーロー語 *hagar* と一致することから彼の見解は十分考慮に価する。更にこの結論の中で、/θ/ > /h/ が生じた音

的環境を weakly stressed position としていることは、特筆に値する。すなわち $p > h$ と n 脱落とが生じた条件が全く重なり合うからである。 $p > h$ も n 脱落も同じ条件下（アクセントの弱い位置）で起きたということは、これらが同時に生じたと帰着せざるをえない。すなわち *higar/hagar* の語源解明に、 $p > h$ をこうむった **higat/*hagat* を、その直前段階として設定すると無理なく説明できることは、同時に n 脱落は、アクセントの弱い位置で生じたことを裏書きしていると言えよう（VI章の(1)を参照）。従って(4)の蓋然性は極めて少く、 $t \rightarrow r$ が生ずるには、その前土台として **higat/*hagat* が成立していなければならぬばかりでなく、その経路となった *hvar* が方向の意をも獲得したのは、比較的時代が下ってからと考えられるので、(1)も難しいであろう。愚見では、(2)が最有力であると考え。すなわち三者の *relativ kronologi* は、 n 脱落と $p > h$ は同時、次に $t \rightarrow r$ の順であると提起できる。(3)のようなこれ以上細かい *kronologi* は限定しがたい。フェーロー語では、文献の現れるのが比較的遅いことも手伝って不明な点が数々あり、細部にわたる解明が一層困難になっている。いずれにせよ、ここで言えることは *higar/hagar* の語源解明に、その前段階として、 $p > h$ の変化と n 脱落とを共に受けた語形を設定することによって、*hingat/pangat* を源とする変化の流れが、都合よく説明がつくことであった。

**hinn/pann-veg-at* は、古アでは *higat/pagat* で変化は停止した。古期東ノルド語では *higat/pigat* から *hit/pit* へと発展した。フェーロー語では *higat/pagat* から、やや特殊な変化を経て *higar/hagar* にまで展開していった。*higat/pagat·pigat* から、それぞれ更に変化を継続させ、形は異なるにせよ、新しい語を現出さしめた意味で *hit/pit* と *higar/hagar* は、同類の *innovation* であった。

静止の意の疑問副詞を、方向の意にまで広げて使用しているフェーロー語の *hvar* については先に触れたが、これと同じ用法（現代英語の疑問副詞 *where* 参照）が、ノルウェー語 [Bokmål] *hvor* ; [Nynorsk] *kvar*,

kor にも認められることは、また新たな問題を提起している。

IX. 結び

古期東ノルド語では、hingat/pingat, hingat/pingat, hit/pit とこれに加えて hinnig¹⁸⁾ などいくつかの方向の副詞が並存していた。これらのうち、hit/dit が勢いを得、それ以外の語を淘汰して、後にスウェーデン語の方向の副詞を独占してゆく⁴¹⁾、またノルウェー両言語にも入って定着、一方デンマーク語では衰退し、代りに -hen を末尾に持つ形が一般化した。⁴⁾ (この -hen は Bokmål の疑問副詞 hvorhen にも入りこんでいる。)

拙稿では、hit/dit の語源を解明せんがため、古くへとさかのぼったが、これ以後現代に至るまで、各言語においていくつか存在した方向の副詞が、それぞれ、また相互にいかなる変遷を遂げていったかは、今後の綿密な文献学的研究を俟たねばならない。

注

- 1) 詳しくは、Campbell (1959) § 677ff., Sivers/Brunner (1951) §321.
- 2) 空間を示す副詞は、勿論 här..., där..., var..., だけではない。表以外にも、たとえばスウェーデン語の

ute	～ ut	～ utifrån
inne	～ in	～ inifrån

 hemma ~ hem ~ hemifrån 等に対応する副詞は他の北欧諸語にもあるが、本稿の主眼は、hit, dit, vart のような代名詞から派生した空間の副詞にあるので、必要に応じて上記のような副詞を挙げる以外は、冒頭の古期英語の表共々省略した。Wessén (1970) §83, Lindholm (1981) s.105.
- 3) スウェーデン語、デンマーク語には、現代アイスランド語の héðan 系列と同語源の [ス] häðan, [デ] heden タイプもあるが、いくつかの慣用句を除いては、現代では -från/-fra タイプに取って代られている。
- 4) hid/did は特定な表現に限られており、通例 -hen タイプが使用される。デンマーク語を中心にして存在する -hen の語源に関しては、“dels opstået ved

sammentrækning af II. *heden* 'herfra' dels lån fra (et hermed besl.) mnty. *hen.*" (Nielsen 1969)

- 5) Lockwood (1964) §41, 50, 53.
- 6) このように起源が詳らかでない *-i* は、他にも名詞の中性・複数・主格・対格にもみられる。例, *borðini* (Lockwood §26, 3). 語源的には *hiðani* にも *borðini* にも *-i* は付加しないので、理由はともあれ、二次的なものであることは間違いない。
- 7) 時代区分に関しては, Holmberg/Janzén (1963) s. 60f., Wessén (1975).
- 8) [] 内は, Laxdœla Saga (hrsg. Kr. Kálund 1896) LXXXIV-1 より補った。
- 9) Edda 詩においては, *heðra* の例は一つもなく, *paðra* のみが *Atlamál* に一度出てくるだけである。
- 10) 参考までに, 教人の学者の主張する年代をあげると

	Stentofthen	Björketorp
Noreen (1923)	2. hälfte des 7 Jahrhs	gegen 700
Jóhannesson (1923)	Mitte des 7 Jahrhunderts	8. Jahrhundert
Krause (1971)	Mitte d. 7 Jh. s.	2. H(älfte) d. 7. Jh. s.
Antonsen (1975)	600~650 A. D.	600~650 A. D.

これら二碑文についての詳しい議論に関しては, Jacobsen (1935, s. 15~46), Krause (1966, I Text. s. 209~218), Nielsen (1968, s. 28~47).

- 11) v. Friesen (1928) s. 20ff., Nielsen (1968) s. 28.
- 12) Jacobsen (1935) に呪文を含むルーン碑文の研究がある。
- 13) *heðra* に当る *hederA* (Stentofthen) が, Björketorp では *hAiderA* になっている事情については Krause (1966, Text. s. 216), "Urn. (und an.) *e* ist in *hAiderA* (=an. *heðra-*) mit *ai* wiedergegeben, wohl versehentlich unter dem Einfluß von *hAidR* am Anfang der Zeile."
- 14) ノルウェーの *Tþrvika B* 碑文の *eþro* を, Krause (1971) は §21, 6 及び s. 171 で [h]eþrō = got. *hiprō „von hier“ と出発点の副詞と解釈しているが, 同書§101で彼自身認めているように極めて疑わしい。

- 15) Lehmann (1966), Kufner (1972), 新しくは Nielsen (1979).
- 16) Brugmann (1904) §581, Kieckers (1928) §138, やや懐疑的なのは Hirt (1932) II §89, 8.
- 17) Holthausen (1948) は, *paðra* の語源で suffix に関して, コメントを付せず *go. paprō* を挙げているのは適当とは言えない。更に Sijmons/Gering (1931) II, s.406, Am. 93¹ の注として “*papra* (in der Edda nur hier) ist altnord. in der bedeutung von *par* nicht verschieden, während es ursprünglich, wie got. *paprō* beweist, nicht das wo?, sondern das woher? bezeichnete, also die bedeutung des altn. *papan* hatte.” に至っては, 古アの *paðra* とゴート語の *paprō* を suffix まで完全に同語源と誤って解釈している。
- 18) *hinnig*, -ug と対を成す *pannig*, -ug 等は奇妙なことに, 古スでは欠落している。Rydqvist (1868, 1870, IV₂, s.433).
- 19) *hingat/pangat* の語源は, 各々 **hinn/pann-veg-at* とする説で, 一般に定着しているが, Rydqvist (1868, 1870 IV₂, s.433) が述べている所によれば, Grimm (Gram. III. 174) は, *gata* に帰すこともできるとしている。
- 20) この *pei* を *pata* の *lokativ* ではないとする説もある。Kieckers (1930, §110) は否定しているが, 次のような説を紹介している。“Die Annahme, daß *pei* als Relativ (partikel) hinter einem Indefinitum aus **pa-ei* entstanden ist (*pa*=urgerm. **pat.* idg **tod* (vgl. *hva* §117), -ei ‘Relativpartikel’, s.§115) scheint mir nicht richtig.”
- 21) Braune/Ebbinghaus (1973 s.197) より。更に Streitberg (1971, Zweiter Teil. s.147) 参照。
- 22) Eggjum 碑文についての解釈は, Nielsen (1968) s.53~125 に詳しく論じられている。
- 23) *hit* 以下の個所が, **hi-at* の提唱者である Noreen (1923) の Altnord. Gr I の最後の版となった 4. Aufl. (s.377) でも, *h* × *la[n]t* として未解読のままである。
- 24) たとえば日本語の過去形の形をした命令で, 「どいた, どいた!」などはアスペクトの面から捉えれば, ゴート語の *hēr* が命令形 *briggip*, *qim* と結合する点で一面共通している。

- 25) Kuhn (1929), Dal (1930) 参照。
- 26) Cleasby/Vigfusson (1957) の né の B 項を見よ。
- 27) 日本語の「ここにある」、「ここに来る」、「ここへ来る」の中にある助詞「に、へ」とも考え合せると興味深い。大野 (1978) s. 21f.
- 28) pigat は Fritzner によると, DN. II, 231. とあり, V 章でも触れたと同様に, 古スからの借用と解される。
- 29) Reinhammar (1975) s. 172 f.
- 30) higat の語源を, Noreen (1890, s. 374) は, hi-g-at と分析し, 後要素の g をラテン語の hīc の enklitisk partikel -ce と比較しているが, 前要素の *hī に関して V 章で批判したことが, ここでも言えるので, 筆者は当然この説には組みしない。
- 31) Skautrup (1944, I. s. 193, 210), Brøndum-Nielsen (1950, I. s. 34), Holmbäck-Wessén (1979 s. XI ff.).
- 32) 当時 Skåne は, 言語・文化的にデンマークの一部を成していた。
- 33) Brøndum-Nielsen (1968 II. §309), Skautrup (1944 I. s. 235 f.)
- 34) Noreen (1904) §472, B, 2, で adän. thiat を実例として挙げている。長音 ī は, j (<g) が直前の i と融合して生じたか, あるいは j (<g) 脱落に伴って, i 母音の代償延長を起したかの二通りが考えられる。
- 35) piat が実在する一方で, *hiat の例が見当たらない事実と, この g 消失とを同時に説明できるもう一つの方法がある。すなわち pigat において, この語の語頭・語末の子音は “dental” の要素を持つ点において共通であるがために, 語中の g を脱落させる一種の sporadic assimilation とも考えられる。これは, 二点を同時に説明できる利点はあるが, sporadic とするため, 古アでも生じた可能性ありとする反論は避けられない。他に問題を抱えた g 脱落の例として, Noreen (1904) §311, 2, c, Anm. 3, 及び §328, 1, b.
- 36) かような hiatus に関連した問題については, Bandle (1973, s. 42) 参照。
- 37) やや類似した現象を参考として挙げるなら, 現代スウェーデン語の口語体における語中音省略がある。例, dan (=dagen), dar (=dagar), nån (=någon), stan (=staden), sån (=sådan), sen (=sedan) 等。もっとも, これら語中音脱落は, 散発的で一定の音変化法則を立てることは難しい。

- 38) Noreen (1904) §117 Anm., Kock (1906) I. §299 及び同著者 (1923) V: 1. §2139.
- 39) *hingat* から *hit* への変化過程にならって, **hverngat* > **hvergat* > **hverat* > *hvert*(?) と仮に想定すると, まず第一に, **hvergat* から *hvert* に至るまでの音変化の説明が, 極めて困難に陥ることや, 文献に実在する *piġhat*, *piat* に相当すべき中間過程の **hvergat* などが一切存在しない等の難点があるため, この仮説は拒否せざるをえない。先に Noreen が, いみじくも看破したように, *hvert* の語源は, *at* とは無関係に, すなわち *hit/dit* の成立過程とは別個にして, 求めなければならない。
- 40) 対格と方向性についての類似例 *in+Akk* は, Streitberg (1914, s. 217~224) で, すでに触れられている。
- 41) *hit*, *dit* の合成語 *hitát*, *ditát* もある。

Om riktningsadverben i de nordiska språken
med särskild hänsyn till “hit” och “dit”.

av

IKUO SHIMIZU

Sammanfattning

Författaren ifrågasätter den hittills accepterade etymologiska förklaringen att *hit/dit* härstammar från **hī-at*/**pī-at*. Trots att de båda adverben innehåller de gamla lokativerna **hī*/**pī* som förled, finns det varken spår av eller belegg för *hit/pit* (äldre form av *hit/dit*) i fornvästnordiskan. Därför anser förf. att de båda adverben är relativt unga former och föreslår istället följande: *hingat* > *higat* > *hit*, resp. *pingat* > *pigat* > *pit*. *higat* bildades alltså genom n-bortfall i en trycksvag ställning. Därefter uppkom *hit* genom g-bortfall (via j) efter palatalvokalen, vilket skedde huvudsakligen i södra Skandinavien före 1200-talet.

Vidare anser förf. att de färöiska riktningsadverben *higar/hagar* borde härröra från förstadiet **higat*/**hagat* (jfr *pagat*), dvs. p > h ägde rum under samma fonetiska villkor som det ovannämnda n-bortfallet. Dessutom utbyttes

slutljudet *t* mot *r* till följd av inverkan från befintlighetsadverben *her/har* via det interrogativa adverbet *hvar* med både befintlighets- och riktningens betydelse.

参 考 文 献

- ANF=Arkiv för (for) nordisk filologi 1~. Kristiania 1883-88, Lund 1889ff.
- Antonsen, E. H. (1975): A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions. Tübingen.
- Bandle, O. (1973): Die Gliederung des Nordgermanischen. Basel und Stuttgart.
- Barnes, M. (1985): "A note on Faroese/θ/>/h/". Scripta Islandica 36 s. 46-50. Stockholm.
- Birnbaum, H. & Puhvel, J. [eds] (1966): Ancient Indo-European Dialects. Berkeley & Los Angeles.
- Boer, R. C. (1920): Oudnordisch Handboek. Haarlem.
- Braune, W. (1973): Gotische Grammatik. 18. Aufl. neu bearbeitet von E. A. Ebbinghaus. Tübingen.
- Brøndum-Nielsen, J. (1950): Gammeldansk Grammatik I. 2. ændrede udgave. København.
- (1968): Gammeldansk Grammatik II. 3. oplag. København.
- Campbell, A. (1959): Old English Grammar. Reprint 1974. Oxford.
- Cleasby, R. & Vigfusson, G. (1957): An Icelandic-English Dictionary. 2nd ed. with a supplement by W. A. Craigie. Reprint 1962. Oxford.
- Coetsem F. v. & Kufner, H. L. [eds] (1972): Toward a Grammar of Proto-Germanic. Tübingen.
- Dal, I. (1930): Ursprung und Verwendung der altnordischen „Expletivpartikel“ *of*, *um*. Oslo.
- Devlamminck, B., et Jucquois, G. (1977): Compléments aux dictionnaires étymologiques du gotique. Louvain.
- Egilsson, S. (1933): Lexicon poeticum antiquae linguae septentrionalis. 2. Udg.

- ved Finnur Jónsson. København.
- Falk, H., & Torp, A. (1898) : Dansk-norskens Lydhistorie. Kristiania.
- (1903-06) : Etymologisk ordbog over det norske og det danske sprog I-II. Kristiania.
- (1910-11) : Norwegisches-dänisches etymologisches Wörterbuch I-II. Heidelberg. 2. Aufl. 1960. Oslo & Bergen.
- Feist, S. (1939) : Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache. Dritte neubearbeitete und vermehrte Auflage. Leiden.
- v. Friesen, O. (1928) : Runorna i Sverige. 3. uppl. Uppsala.
- (1933) : "De germanska, anglofrisiska och tyska runorna." Nordisk Kultur VI. Runorna. s. 1~79. Stockholm.
- Fritzner, F. (1886-96) : Ordbog over Det gamle norske Sprog 1-3. Kristiania.
- Gering, H. (1903) : Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda. Halle a. S.
- Gordon, E. V. (1957) : An Introduction to Old Norse. 2nd ed. revised by A. R. Taylor. Oxford.
- Hellquist, E. (1970) : Svensk etymologisk ordbok I-II. 3. uppl. Lund.
- Heusler, A. (1967) : Altisländisches Elementarbuch. Siebente, unveränderte Auflage. Heidelberg.
- Hirt, H. (1931-1934) : Handbuch des Urgermanischen I-III. Heidelberg.
- Holmberg, P., och Janzén, A. (1963) : Att studera nordiska språk. Stockholm.
- Holmbäck, Å., och Wessén, E. (1979) : Svenska landskapslagar tolkade och förklarade för nutidens svenskar. Skånelagen och Gutalagen. 2. uppl. Stockholm.
- Holthausen, F. (1948) : Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch des Altwestnordischen. Göttingen.
- (1974) : Altenglisches etymologisches Wörterbuch. Dritte, unveränderte Auflage. Heidelberg.
- Jacobsen, L. (1935) : Forbandelsesformularer i nordiske runeindskrifter. Stockholm.

- Jansson, S. B. F. (1963) : Runinskrifter i Sverige. Stockholm.
- Jóhannesson, A. (1923) : Grammatik der urnordischen Runeninschriften. Heidelberg.
- Kieckers, E. (1928) : Handbuch der vergleichenden gotischen Grammatik. München.
- Kiil, V. (1955) : "Runesteinen fra Eggjum i Sogndal." ANF 70. s.129-181. Lund.
- (1964) : "Nye Kommentarer til Eggjum-runene." ANF 79. s.21-30. Lund.
- Kluge, F. (1913) : Urgermanisch. Vorgeschichte der altgermanischen Dialekte. Strassburg (Grundriss der germ. Philol. 2³.)
- Kock, A. (1882-86) : Studier öfver fornsvensk ljudlära I-II. Lund.
- (1906-29) : Svensk ljudhistoria. I-VI. Lund.
- Krahe, H. (1969) : Germanische Sprachwissenschaft I-II. Berlin.
- Krause, W. (1948) : Abriss der altwestnordischen Grammatik. Halle (Saale).
- (1966) : Die Runeninschriften im älteren Futhark. I. Text. Mit Beiträgen von H. Jankuhn. Göttingen.
- (1971) : Die Sprache der urnordischen Runeninschriften. Heidelberg.
- Kufner, H. L. (1972) : "The grouping and separation of the Germanic languages." Toward a Grammar of Proto-Germanic, ed. by F. v. Coetsem & H. L. Kufner, s.71-97. Tübingen.
- Kuhn, H. (1929) : Das Füllwort *of-um* im Altwestnordischen. Göttingen.
- Kálund, Kr. [hrsg] (1896) : Laxdoela Saga. (Altnordische Saga-Bibliothek 4.) Halle a. S.
- Lehmann, W. P. (1966) : "The Grouping of the Germanic Languages." Ancient Indo-European Dialects, ed. by H. Birnbaum & J. Puhvel, s.13-27. Berkeley and Los Angeles.
- Lindholm, H. (1981) : Svensk grammatik. 3. uppl. Lund.
- Lockwood, W. B. (1964) : An Introduction to Modern Faroese. 2. printing. København.
- 森田貞雄(1981) : アイスランド語文法。大学書林

- Neckel, G. [hrsg] (1962) : Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern I. Text. Vierte, umgearbeitete Auflage von Hans Kuhn. Heidelberg.
- Nielsen, H. F. (1979) : De germanske sprog. Odense.
- Nielsen, Å. N. (1968) : Runestudier. Odense.
- (1969) : Dansk etymologisk ordbog. 2. reviderede udgave med et tillæg. København.
- Nordling, A. (1928) : Ords-katten i Södermannalagens textcodex samlad och ordnad. Helsingfors.
- Noreen, A. (1890) : "Etymologier." ANF 6. s. 358-384. Lund.
- (1904) : Altschwedische Grammatik mit Einschluss des Altgutnischen. Halle.
- (1913) : Geschichte der nordischen Sprachen. 3. Auf. Strassburg (Grundriss der germ. Philol. 4³)
- (1923) : Altisländische und altnorwegische Grammatik. 4. Aufl. Halle.
- Olson, E. (1904) : Östgötalagens ljudlära. Lund.
- 大野晋 (1978) : 日本語の文法を考える。岩波新書
- Ottelin, O. (1900-05) : Studier öfver Codex Bureanus I-II. Uppsala.
- Pipping, H. (1913) : Äldre Västgötalagens ords-katt. Helsingfors.
- Pipping, R. (1919) : "Erikskrönikans ords-katt enligt texten i cod. Holm. D2." Studier i nordisk filologi 10. s. 1-155. Helsingfors.
- Reinhammar, V. (1975) : Pronomenstudier. Uppsala.
- Rydqvist, J. E. (1850-83) : Svenska språkets lagar I-VI. Stockholm.
- SAOB = Ordbok över svenska språket utg. av Svenska akademien. Lund 1898 ff.
- Schlyter, C. J. (1877) : Ordbok till Samlingen af Sweriges Gamla Lagar. Lund.
- Schmidt, G. (1962) : Studien zum germanischen Adverb. Berlin.
- Seip, D. A. (1955) : Norsk språkhistorie til omkring 1370. 2. utgave. Oslo.
- Sijmons, B. u. Gering, H. (1931) : Kommentar zu den Liedern der Edda. 3. Band, 2. Hälfte. Halle (Saale).
- Sivers, E. / Brunner, K. (1951) : Altenglische Grammatik nach der angelsächs-

- ischen Grammatik. Zweite, revidierte Auflage der Neubearbeitung. Halle (Saale).
- Skautrup, P. (1944) : Det danske sprogs historie. Bd. I. København.
- Streitberg, W. (1896) : Urgermanische Grammatik. Heidelberg.
- (1914) : "Zur gotischen Grammatik." Festschrift für Ernst Windisch, 1914. s. 217-224. Leipzig.
- [hrsg] (1971) : Die gotische Bibel. Sechste, unveränderte Auflage. Heidelberg.
- Sturtevant, A. M. (1930) : "Old Norse phonological notes." The Journal of English and Germanic Philology 29. Urbana, Ill.
- Söderwall, K. F. (1884-1918) : Ordbok öfver svenska medeltids-språket. Lund.
- (1925-73) : Ordbok öfver svenska medeltids-språket. Supplement av K. F. Söderwall, W. Åkerlund, K. G. Ljunggren & E. Wessén. Lund.
- Tamm, F. (1890-1905) : Etymologisk svensk ordbok. I. Uppsala.
- (1899) : Om ändelser hos adverb ock arkaiskt bildade prepositionsuttryck i svenskan. Uppsala.
- de Tollenaere, F., & Jones, R. L. (1976) : Word-Indices and Word-Lists to the Gothic Bible and Minor Fragments. Leiden.
- Torp, A. (1919) : Nynorsk etymologisk ordbok. Kristiania.
- Voyles, J. B. (1968) : "Gothic and Germanic." Language 44. s. 720-746. Baltimore.
- de Vries, J. (1977) : Altnordisches etymologisches Wörterbuch. 3. Aufl. Leiden.
- Wessén, E. (1961) : Våra ord, deras uttal och ursprung. Stockholm.
- (1966) : Isländsk grammatik. 2. uppl. Stockholm.
- (1969) : Svensk språkhistoria. I. Ljudlära och ordböjningslära. 8. uppl. Stockholm.
- (1970) : Vårt svenska språk. 3. uppl. Stockholm.
- (1975) : De nordiska språken. 10. uppl. Stockholm.
- Wilmanns, W. (1896) : Deutsche Grammatik. II. Wortbildung. Strassburg.
- Young, G. V. C., & Clewer, C. R. (1985) : Føroysk-Ensk Orðabók. Peel.